

譲れないもの

白井くろ

そもそもの始まりは実に些細なことだった。

「小学生の時は忍者ごっことかやってた」

水泳部の部活中、なんでもない雑談の中で誰かが言った。俺もやった。俺も。懐かしいな。周囲も同意して子供時代、特に何をして遊んでいたかを我先にと喋り出す。プールサイドで楽しい声あげる一年生を、上級生たちは休憩中だということもあって微笑まじげに見守っていた。

「変わり身の術とかやってみたかったな」

「わかるそれ。鬼ごっここの時とか使えたら最強じゃん」

「俺雲隠れの術をマスターしたい。切実に」

「いい加減覚悟決めて怒られるよ」

「無理、怖い」

「俺、ストロー使って水遁の術やったことあるわ」

最後の発言に、その場にいた全員がそろって俺もやった、と言った。何人かは苦笑いしていて、おそらくそんないい思い出はないのだろう。だがその中の一人、鈴木の一語に一言に全員がキョトン顔をした。

「ストローでもやったけど、かまぼこのストローでやって死ぬかと思った」

彼らの心の中を代弁すれば、「え、なんでそこにかまぼこ？」となるはずだ。戸惑いを隠せない周囲に、鈴木自身もキョトンとする。お互い「え？」という顔つきで見つめ合い、妙な沈黙が流れた。

その沈黙を破ったのは加藤だった。

「……ストローとかまぼこはどこで繋がったんだ？」

「……普通かまぼこって細いストローみたいなので簧巻きにされてるだろ？」

「それは普通じゃない」

鈴木以外がハモった。鈴木はぼかんとした後、徐々にその顔を驚愕の色に染めていった。

「かまぼこの普通って何？」

思わずといった風に呟いた彼に周囲が答えた。

「笹かまぼこ」

「焼かまぼこ」

「板かまぼこ」

また時が止まった。

一番に復活したのは笹かまぼこ派の北川。

「笹かまぼこ。うちの地元は大体笹かま。土産にも贈答品

にもなる万能かまぼこだぞ？伊達家が名前の由来なかまぼこ界のプリンスたる笹かまぼこが普通」

それを鼻で笑うのが焼かまぼこ派の林。

「伊達家でプリンスならこっちは天下統一した秀吉いるから焼かまぼこがキング。ご飯のお供にもなって最強だ」

最後に残った板かまぼこ派の加藤はそんな二人に溜息をついた。

「そんな地方ローカルなかまぼこが普通なわけないだろ。

全国どこにでも売っている板かまぼこが普通のかまぼこだ」

三人を取り巻く空気に、ピシリと亀裂がはしった。

「いやいや、何言ってるんの。笹かまだろ」

「一番は焼かまぼこ」

「全国区の板かまぼこ」

不穏な空気になってきて、周りの一年生、それまで見守っていた上級生もざわざわし出した。話の始まりともいえる鈴木はというと、口を挟むに挟めずおろおろしている。

そうこうしているうちに言い合いで収まらなくなったのか、完全に据わった眼で三人が宣言した。

「だったら勝負だ」

「勝ったやつのかまぼこが一番だ」

「自由形五十m一本勝負だ」

「ついでに鈴木も簀巻きかまぼこ派として参加しろ」

いつの間に決まったのか。鈴木が完全に巻き込まれただけの件。これ部長に怒られるんじゃないや……。そんな周囲の反応をよそに、鈴木を引きずりながら三人はプールの飛び込み台へと向かった。

キャップとゴーグルを装着し、プールの端に立つ。スターターは近くにいた同級生に頼んだ。

この勝負、負けられない。北川は思った。

自分の意地と地元民としてのプライドがかかっている。やってやろうじゃねえか。林の闘志は完全に燃えあがっていた。

悪ノリだったとは思いますが、今さら降りるつもりはない。

やるからには勝つ。静かに集中を高める加藤。

もう帰りたい。とぼつちりを受けただけの鈴木はすでにちよつと涙目だった。

「位置について」

飛び込み台に登り、構えた。ぴんと伸ばした指先が微かに震えている。

「よいい」  
爪先に力が入る。落ち着け。まだだ。耳を澄ませろ。聞き逃すな。

けれど、緊張しながらいくら待ってもホイッスルの音は聞こえてこない。さすがに変だと思い、鈴木がスターターに目を遣るとなぜか固まっていた。その理由はすぐに知れた。

「おまえらなにしてる」

地を這うような声に、飛び込み台に登っていた四人全員がいつせいに体を起こして後ろを見た。そこにはこめかみを引き攣らせ、普段の数十倍も凶悪な目つきをした水泳部部長が仁王立ちしていた。

「とりあえずこつちこいや」

「「「はこ」」」

蛇に睨まれた蛙の如く、四人はおとなしく部長の前に整列した。

「俺の指示を聞いてなかったのか？休憩終わったら基礎練しとけって言ったよな？なんで本気で泳ごうとしてるん

だ？」

表情の割に口調が淡々としていて逆に怖い。鈴木たちは現実逃避気味に視線を交わした。

(部長おこだよ……)

(おこどころじゃねえよ、激おこだろ)

(激おこぶんぶん丸に一票)

(ムカ着火ファイヤーに一票)

「お前らふざけてんじゃねえ、激おこステイクファイナリアリティぶんぶんドリームだぞこつちは！罰として外周行つてこい！」

「「「すいませんでした！」」」

怒鳴り声から逃げるように駆けていく四人。それを見送った部長は残った部員に向き直る。

「そつちはそつちでなんであの馬鹿どもを止めなかった！」

「「「ごめんなさい」」」

そんな水泳部のとある一日。

終

第三回突貫企画工事号

2014年10月27日発行

編集人 渡科由太

印刷所 広島大学文団BOX